

民俗学と人文地理学の狭間に立って：沖縄研究に想う

小川，徹

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

148

(終了ページ / End Page)

162

(発行年 / Year)

1979-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013093>

民俗学と人文地理学の狭間に立つて

——沖繩研究に想う——

小川 徹

本日の演題を構想するに当って、演者である私は、そぞろ四十余年の昔を想起していた。会場の方のほとんどはご存知ないであろうが、昭和十年に刊行された『日本民俗学研究』には、佐々木彦一郎の論文「人文地理学と民俗学の境」が載せられている。

『日本民俗学研究』については、専門の方ならば周知のことと思うが、一般の来聴者のためにひと言説明しておく。昭和九年の夏、柳田国男の還暦を記念する講演会が開催された。講演者の顔ぶれには、柳田自身の他、折口信夫・金田一京助など当代の学者が顔を揃えたが、そのなかに混って、沖繩を代表する伊波普猷の名も見えた。伊波の演題は「南島稲作行事採集談」。談とあるが、内容からすれば、これは沖繩稲作農耕儀礼の体系的な分析であり、彼の学問的業績のなかでも一きわ鮮やかな子ノ星と輝く傑作であり、当時、これに比肩されるべき業績は本土ではまだ生まれていなかったことを付言し

ておきたい。以上の方々の他は、一応、柳田の弟子に当るまだ若い研究者たちで、その桜田勝徳・関敬吾・大間知篤三・橋浦泰雄・最上孝敬などに混って、佐々木彦一郎が登場するのである。

日本における学問としての民俗学は、まさにこの時誕生したのであり、『日本民俗学研究』の刊行はながく記念されるに価しよう。では、この記念すべき時に当って、筆者である私と立場を同じうする佐々木は何を語ったであろうか。

余談ながら付け加えておくと、当時佐々木は、私が学生として在籍する地理学教室の助手であり、私は日常その言動に接し、指導を受ける立場にあった。佐々木はその後間もなく翌々十一年四月、三十五歳で夭折するのである。今日から思えば、年齢的にも大きく距ってはいなかったわけであるが、当時、東大の助手といえは社会的地位も現代とは格段に高いものと考えられ、私らにとっても大先輩とみえた。事実、私などの民俗学的採集（これを当時は採訪といっていた）には、佐々木から受けた影響があとあとまで残った。したがって、聴衆のなかで佐々木の演題にもっとも期待したのは他ならぬ私であつたろうといえる。

しかしながら、結果は予期したほど手答えのあるものではなかった。たしかに佐々木は、人文地理学と民俗学の両面にわたる性質の事象を数えあげ、これに関連した内外の業績を述べている。しかし、いったいなぜそれらの事象について両者が関連するのか、あるいは、両つの学問に関連するこれら事象がなぜ取り上げられねばならないのか。このような重要な課題について、佐々木はほとんど言及し

ていない。実は、今回の講演に際して、念のため、「人文地理学と民俗学の境」を再読してみたのであるが、結果は同じであった。

職業としては明白に地理学の側に置かれ、学問的関心の点では民俗学に属した佐々木は、両者の関係の問題に無関心ではいらなかったに違いない。にも拘わらず、その点が曖昧なままになっているのは不可解なことである。だが、また、いささか穿ちすぎかもしれないが、彼は、彼のその立場の故に慎重でありすぎたのではあるまいか。そう考えられなくもない当時の情況も、私はまったく知らないわけではない。

いずれにしても、人文地理学と民俗学の両者に関心をもち、そのために悩んでいた——当時の佐々木彦一郎の立場は、その後の私自身の立場でもあり、したがって、『日本民俗学研究』にみられる歯切れの悪さを一途に批判する気持ちにはなれない、というのが私の心情である。

しかしながら、この際、あえていうならば、人文地理学と民俗学の二つに、あんなにまでこだわる必要は、もともと、どこにもなかったのである。近代人文科学の歴史を一見すれば明瞭であるように、両者は本来あい関連して発達したのであり、それは科学的対象自身がもつ性質からの当然の成り行きだったのである。両者が別々の学問であるとする概念、それ故、共通の領域で作業することを何か自己とともに咎めだてする意識、それは、本来どこにも存在しなかったのであるといわなければならぬ。

この点を理解していただくために、私の乏しい体験をお伝えする迂回を許していただきたい。

齡六十になんなんとして、私は始めて海外渡航の機会を与えられた。夢のような経験であり、そして後になればなるほど、なぜ若い時に来てみなかったかと悔まれたのであるが、不況と戦争と病気に悩まされたわれわれの世代にとって、所詮は無理だったのが実情であるけれども、この旅行のなかで、二つのことがらを体験したことが印象に残っている。その一つは、今日の演題とは直接関係は薄いが、ことの序でに述べておきたい。

最初の点について申し上げると、丁度この旅行中に私の欧文の論文「日本の民家」⁽³⁾が、フランス国立民族学博物館の機関誌に掲載された。幸運な偶然から、在日フランス地理学者プズー氏の好意でその運びとなり、もう一人の友人の甚大な援助でどうやら原稿を完成し、編集部に送ったものであった。原稿を送付すると、折り返し当時の博物館長ジャック・ミロー氏から直々の来信があつて、編集部見解として種々の注意と訂正方の依頼を受けた。わが国でも一部の学会誌がいまではこの方式を採用しているが、彼我の差、つまり、機関誌編集者の持っている権限の強さというものをまず知らされたわけである。そのなかでとくに印象的だったのは、私が、民俗学をわが国の通念にしたがつて *folklore* としたのに対して疑義をさし插まれたことである。要約すれば、フォークロアという名称は、民間の歌謡・舞踊など、民俗芸能の領域をとくに指すもので、これを学問の全領域に用いる向もなくはないが、その場合、多分に好奇的な興味によるディレクティブイズムに偏しているので、私の場合適当ではないというのである。確かに、彼の地のレコード店などでみても、古典やポピュラーなどの棚の他

に、folklore という棚が設けられてそこには民謡類が収容されている。日本の民俗学が、もしそのような狭く偏った領域ではなく、有形無形の文化や社会事象までを取扱うなら ethnography を用いるべきである。この場合、この用語は共時的に多民族を比較研究する民族学 ethnology と共存する。もし、ひとがフランスの民俗だけを研究するならば、それは french ethnography なのであって、日本民俗の研究は、研究者が日本人であろうとフランス人であろうと japanese ethnography である——というのである。

ethnography を通念として民族誌と訳し、他民族の文化の記述と考えていた私には一寸したショックであつたが、その後、旅程をユーゴスラヴィアまで足を伸してみると、ユーゴの大学の民俗学科がいずれもその名称として ethnography を用いているのを見て、やはりそうかと頷かれたことであつた。以後、私自身は欧文では folklore は限定された場合にしか用いないことにしている。

申し上げたい第二の点はやはりユーゴスラヴィアの大学での経験である。私が訪れたのはザグレブの大学と、ベオグラドの大学の二つでしかないが、そこで端なくも、人文地理学と民族誌と書く民俗学が実によく協働している現状を見聞することができた。もちろん、両者は教室としてはそれぞれ独立の組織をもつが、哲学部のなかでの教室はつねに隣りあっており、図書室も共通である。ベオグラドの図書室では一人の民俗学の学生に会った。彼の修士論文はユーゴ農村の伝統的な犁の研究である。これで感心させられたのは、ユーゴの在来犁については、すでに全国の郡単位ごとに調査があり、

彼の課題はその未施行部分を实地調査で埋めればよいのだ。この調査は民俗学のイニシアチブで行われたものである。ユーゴスラヴィアの在来犁は国の北半では有床犁であり、これはハンガリー系であり、これに対して国の南部ではトルコ系が分布し、山間部にはユーゴ固有の原始的な犁、換言すると、自然木を利用した在来犁が残存していることが、老大な枚数の調査カードをめくり、分布を地図に記入することによって浮び上ってくる。その下図を見せながら、この学生はいかにも楽しそうに語ってくれたが、私の方では、日本の民俗学や人文地理学の現状とひきくらべて感無量であった。

ユーゴスラヴィアのような社会主義国であっても、国の伝統文化をけっして無視してはいない。それどころか、むしろそれを強く保持しようとしている。ベオグラドも旧市街は破壊ややみくもの変形は制限されて、よく風致を残しているが、ザグレブの街もオーストリア統治時代のウィーン的な風致がよく保存され、壮大なカトリック教会の傍には、土俗的な信仰の聖地があって、捧げられた無数のロウソクが美しく輝いていた。西欧諸国とても例外ではないこと、季節の祭日には、人々はその村、その地域固有の服装で町に集うことは、テレビでもよく紹介される通りである。スイスのチューリヒ市の祭日には、中世、この市を構成していたギルドのメンバーが、各ギルドそれぞれが保つ中世の服装でこれに参加するのであって、確か、大学総長も特定の服装で参加すると聞いた。改まった日には一斉にモーニング、日曜の外出にも背広にネクタイという日本の現況はいったい誰がそれを決めたのかと聞いてみたいものである。

このような伝統尊重のヨーロッパ一般の傾向は何によって保たれているのか。この問題を論ずる余裕も用意もないが、本題の関係からは一言触れておかねばならない。答は明白である。ヨーロッパという大陸は多民族の地域であり、今日でこそ、各民族がそれぞれに国家を形成しているが、かつては互いにあい争い、弱肉強食の政治的文化的闘争が絶えることがなかったのは周知の話。それであればこそ、民族は絶えず自己主張に力を尽し、それが伝統の保守につながったし、現にまだつながっているのである。この伝統、これを文化として体系的に把えようとするのが、主として民俗学^{エスノグラフィ}の任務である。人文地理学の立場からいっても、本来、地域性の存在を前提として認め、これを分析し説明するのが主たる任務である。今でも、人文地理学とは自然と人間の学問であると決めてかかる人もあるが、自然という要因だけで人間が説明しきれるといった人文地理学者は、その主流のなかには一人もいない。民俗学も人文地理学もヨーロッパで誕生した。ヨーロッパでの地域性とは民族性に他ならない。さらに一民族社会のなかでも、スモールトラディションとしての個々の地域文化の差のあることはいうまでもない。かくて地域性をめぐる研究は、両者の方法論的確立とは表面無関係に今日まで続き、研究者の次元では両者の「境界」は本来なかったのである。社会学でも、フランスの社会学者デュルケムが方法論的には人文地理学と一線を画しつつ、しかも現実にはその主宰する機関誌「*Année Sociologique*」の編集メンバーとして、一時期ではあるが、フランス人文地理学の第一人者ド・ラ・ブラーシユの女婿・ドマンジョンを迎えたというエピソードもある。

ただ、近代化に関して後発のわが国では、学史的な経緯とは無関係のままに、両者が、それぞれ既製品として輸入されたところに、「境界」の問題が派生し、われわれをして長く悩ませる機縁をつくり出したのである。この点について、民俗学は日本では長らく在野の学問であり、いきなり官学に座を与えられた人文地理学とは状況が異っているし、また、柳田国男という不世出のリーダーを当初から保持していた。また初期の人文地理学者のなかには、たとえば小田内通敏のように、柳田とも関係があり、自分自身ヨーロッパ的学風を継承したという点で注目すべき存在もあったことなど、なお詳説しておかなければならぬ点を多々申し述べているので、くれぐれも以上はごく大筋を述べていると承知していただきたい。

その後、人文地理学では、商工業社会や都市社会の問題を好んで取り上げるようになり、経済地理学が発達するとマルキシズムの影響も入ってきて、民俗学だけが近隣科学であるとはいえなくなった。このことは、洋の東西を問わず共通の状況である。ただし、わが国では、このような人文地理学の発展とともに民俗学的見地との疎隔がほとんど決定的となってゆくが、本元のヨーロッパでは新しい発展は発展として、当初以来の学問的関心の伝統は依然として残った。この差は、要するに、あまりに単一な文化社会に育った学問と、多民族文化の角逐から生れた学問的伝統の差であったことを、指摘しておきたいのである。

そのようなことを念頭において、同じ問題に悩みつつではあるが、佐々木とはよく似ているが、本

当は違った演題として、本日のような形を選んだわけである。佐々木は境界にこだわった。私も、民俗学と人文地理学の両つの人文科学があることは認める。しかし、私の場合には、その境界は問題ではない。二つの学問はいわば二つの山脈である。二つの山脈の裾は互に入り組んだ谷間をなしている。旅人はその谷間を縫って進んでゆく、というのが私の行き方であるといえれば判っていただけだろうか。とくに、沖繩のように、いまだに強烈な個性を備えた一文化地域を対象とする時、このことは、とりわけ重要ではないか。ありのままをいえば、沖繩研究に手を染めた当初、私は、沖繩をよく知らず、その個性がこれほど強烈なものとは考えていなかった。『海南小記』ぐらいは読んでいたのであるが、しかし、私にとって沖繩は沖繩県であり、日本の一民俗地域のように考えられたのである。しかし、採訪の第一着手で私はいやというほど、彼我の差を教えられた。たとえば、私は、当時先輩に学んでいた日本農村社会学の手法にしたがって、そのために必要なデータを確かめようとした。具体的にいえば、本土の村落社会なら程度の差こそあれ、必ず見つかるとした。沖繩には門中という同族団として当時は一般に受けとめられていた社会的組織があることは知っていたからである。ところが、私の接した村落やその地方では同族団を突きとめられない。極端にいえば、沖繩の村々には世帯サネはあるが家はないのである。門中は本土のように家連合ではなく、親族が形造るなんらかの組織であるが、その隣郭は周辺がまったく定かでない。いったいそれは何であるのか。皆目見当がつかないままに苦慮しつづけることになった。今日の見解を端的にいえば、沖繩文化とは、本土民俗と、そ

の深いところでは同根でありながら、その後の歴史的発展の沖縄的な独自性の故に、独自の発展を遂げた存在であると考ええる。この独自の文化によって充された地域、それが沖縄だといいたい。

具体論に入らぬままに、長い話が続くのは避けたいのであるが、いまだし論を進めることはやむをえない。しかし、それは、私が沖縄をどのような立場からみたのかということを説明するためには、やはり必要なのである。

一九六〇年が私にとって、沖縄との関わりの最初の年であるが、それ以前にも民俗学と人文地理学の狭間にあつて、混沌のままに研究を続行せねばならぬ長い期間が私にはあつた。ひとくちに言えば、私は民俗学に対しても人文地理学に対しても何から何まで忠実であつたわけではない。学界の主流とはいつも外れたところから私の思索は出発してきたように自分でも考えられる。

まず、民俗学に触れた第一歩において、私は柳田民俗学の外にあつた。学生時代から大戦前夜に至る約十年の間、私は渋谷敬三の主宰するアチックミュージウムに席をおいていた。まったくの一末輩としてであるが、そこで渋谷が撮影した沖縄の十六ミリを見たこと、昭和九年には早川孝太郎・永井竜一（永井昌文教授の叔父）などで組織された十島村調査団に加わつて、奄美大島の名瀬・諸鈍・宇検・大和浜を廻つたこともあつたので、沖縄文化との触れ合いも古いこととなる。しかしアチックの民俗学は柳田民俗学の語彙主義とは異つて、多分に気分的な対抗関係に止まるとはいえ、自然科学主義的な傾向の強いものであつた。昭和十三年頃からは、当時の日本民族学会に設立された民族学研究所に

移り、それが昭和十七年国立民族研究所に解消するまで研究員として在籍したが、この間、一方では所長だった古野清人（昭和五十四年三月逝去）からイギリス社会人類学の方法を鼓吹され、他方、最年長の所員・喜多野清一からは日本農村社会学の方法を親しく教えられたのであった。農村社会を *organic whole* として分析し、総合的に把えるという点で社会人類学と農村社会学の立場は共通しており、それはアチックの自然科学主義とも、柳田民俗学の語彙主義とも、方法論的にまったく異なったものである。私はここから村落社会は、その構造の全体像を集約的に把えてこそ理解されたというに価するものであることを学んだのであるが、そのような考え方は当時自然科学的偏向に陥っていた人文地理学にも、語彙主義的な民俗学にも欠けていたといつてよい。

昭和八年地理学科の学生となった私をまず魅了したのは景観地理学であった。景観の概念は人文地理学における一つの新しい観点で重要な論点であったし、いままそうだと考えるが、私が接したのはいわば日本的景観地理学であって、景観地理学の全容では必ずしもなかったことは大部後になるまで理解できなかった。この日本的景観地理学にあつては、一種の自然科学主義が方法的に強調され、反面、歴史という要因を極力排除しようとする傾向が強く打出されたのである。この点への批判は、官学に所属しない在野の人文地理学から昭和九年以降急激にかつ強力に開始された。官学人文地理学は、しかし、それらの批判に対してはこれを無視したのか、理解し得なかったか、まったく反応を示すことがなかったが、若い学生には大きなインパクトを与えた。こうして個別分科の如何を問わず、人文

科学には歴史的過程への顧慮がつねに不可欠であることが判ってきたのである。

柳田自身が傑出した歴史眼の持ち主であったことは、たとえば名著『日本農民史』によく窺われるのであるが、後継者に対しては、歴史的関心を排除するように厳しく求めたと、私などの目には映るのである。語彙主義に出發して、重出立証法を駆使し、その結果、個々の民俗事象の根元を探るのが、民俗学であるとしたが、その編年方法はすこぶる曖昧で、「もともとAで、それからBに変わった」という一応の結果は出ても、Aの時代とは絶対的に何時の時代なのかはほとんど言及がなく、どの事象の来歴についても「昔は」という一言に終る。AからBへの変化をもたらした原因が何であったのかも、充分にはつき止められぬまま、ただその事実だけが示されるのであった。

もともと、民俗事象には記録が乏しいのであるから、たとえ、相対的なものに終る惧れがあるにせよ、編年の技法が編み出されねばならないはずである。事実、柳田は『人類学雑誌』に発表した労作「蝸牛考」において、言語地理学的手法を多分に取り入れて、美事な成果を挙げている。にも拘わらず、『蝸牛考』を単行本として刊行するに当っては、分布図を取り除いてしまった。周圈論という今日の民俗学で用いられる用語もこの著作から始まるのであるが、柳田自身は後年、この論文を周圈論のための試みとみられることを嫌い、その濫用を戒めるに急であって、これを育成することをなぜか避けてゆくのである。かくて、民俗学における地理学的方法是、戦後、沖繩にも縁の深い鹿児島のものである。小野重朗がこれを再評価するまで、むしろ放置されて顧みられなかった。

ついでながら触れておけば、ヨーロッパ民俗学における地理学的方法、換言すれば分布論的方法について、上記『日本民俗学研究』のなかで岡正雄は、独逸民俗学における地理的民俗学を「大いに利用すべき方法であるが……民俗学にとって成立の条件をなすような方法ではない」と批評しているのも、柳田の見解を代表したものといえるかもしれない。

以上、論述が多岐にわたったが、これを少し整理すると、要するに、私の考えでは、地域文化は、まず集約的に調査されねばならないと同時に、文化地域の单元全域を見通すことが必要であると思われる。社会人類学や農村社会学の見解からすれば、たとえば一村落（いわゆる自然村）を有機的全体 *organic whole* と捉え、その構成要素を分析するとともに各要素がいかに結びつきながら、相互に機能しあっているかを明らかにせねばならない。これが集約的方法 *intensive method* である。日本民俗学のように偶然に頼りながら資料を集めてゆくのでは系統的な研究は到底期待しえない。しかしながら、地域文化は一地点を集約的に捉えただけではまだまだ不充分である。フランス社会学のデュルケム・モースはエスキモーの社会形態学を述べるに当って、十分に用意された一個の事例研究が科学的にも十分な証明性をもちうると主張しているが、モースの言葉ながら、これには異議を挿しはさみたくない。とくに、沖縄の民俗社会の場合のように、伝統的な村落社会の孤立性・閉鎖性がきわめて強く、無数のスモールトライションの世界が展開されている場合、一をもって総てを押し計ることは危険極まりない。どうしても、文化单元としての沖縄というものに一応も二応も光をあてて、その広域的

な全容を把える試みを反覆しておく必要がある。これが広域的方法 extensive method であって、集約的調査と広域的調査を交互に関連させながら、研究を深めてゆかなければ沖縄文化の問題を説明することは出来ないというのが私の当面の結論である。

なお一言すれば、民俗文化の研究には残念ながら法則性の研究が欠除している。最近日本でも流行の萌しを見せている構造主義にせよ、性急な文化構造のシェーマを演繹するに止まっており、果して証明となりうるかどうかは甚だ疑問である。よく見受ける行論であるが、沖縄文化のこれこれの事象は大陸の、あるいは南方の、どこそこの事象に等しい、だから……という式の所論は、あるいは示唆でありうるにしても、果して証明たりうるものであるうか。問題はその関連を現実に示してくれる事実を発見することである。その意味からすれば、集約的と広域的調査であると問わず、歴史的史料は充分に注意されなければならず、もし、その可能性のある史料が見出されたならば、それを充分な批判の上利用することを怠ってはならないと考えるものである。

以上は去る十月一日、那覇において述べた講演の冒頭の論旨である。すでに時日が経過しており、テープも参照してはおらず、ノートに基いて筆をとっているの、当日の行論そのままではないかもしれない、附言も少なくないことをお断わりしておきたい。

講演ではこれに続いて、日本全土にわたる民家型式と、沖縄地域を対象とする親族称呼をとりあげ

てその例示を試みた。この二つのテーマは問題の本質が深く沖縄文化としての民家・親族称呼と係っており、沖縄を導入することによって、日本文化がよく理解される絶好のテーマである。私は充分な見込みがあって、この二つを選んだわけではなく、従前の興味を沖縄に敷衍させたところが、このような好運に恵まれたに過ぎないのではあるが、やはり何か因縁があったように思われてならない。ただし、両者とも、すでに専門誌に発表したものであるので、本紀要に再録することはしない。関心のある読者はつぎの拙稿を何卒ご参照いただきたい。

- 1 「民家型式の系譜 試論」日本民俗学会『日本民俗学会会報』昭和四三年（一九六八）。
- 2 「民家型式の系譜 試論」至文堂『現代のエスプリ』増刊『日本人の原点』2（文化・社会・地域差）昭和五三年（一九七八）。1を補訂再録したもの。
- 3 'Maisons rurales au Japon. Types, répartition géographique et développements historiques' "Objets et Mondes" Musée de l'Homme, tom, X, fasc. III, Paris, 1970.
- 4 'Geographical Distribution and Historic development of the Rural House Types in Japan. — A Cultural Geography —' The Association of the Japanese Geographers: "Geography of Japan" (1980 刊行予定)
- 5 「南西諸島における親族集団称呼の若干に関する年代論的知見——社会地理学的方法による一つの試み——」日本民族学会『民族学研究』第三〇巻第一号、昭和四〇年（一九六五）。